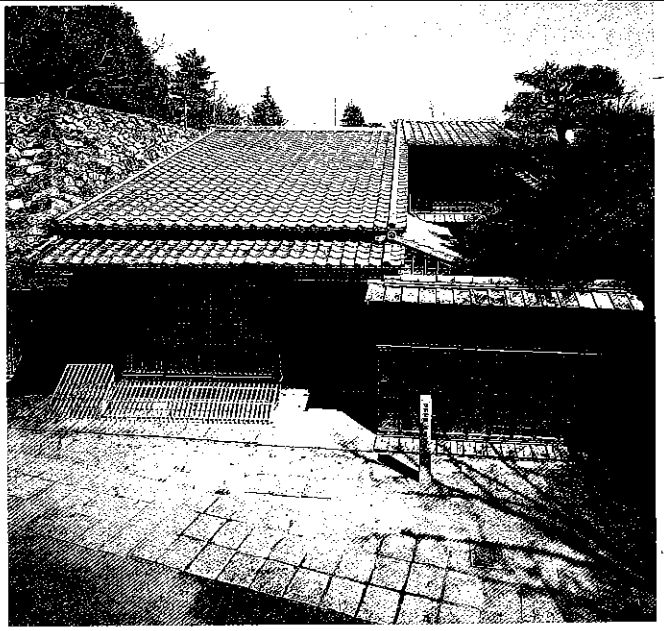
味噌汁前 コラム

町を歩いて宣長世界に入る
本居宣長記念館（三重県松阪市）

本居宣長記念館館長◎吉田悦之 Yoshida Yoshiyuki



【国特別史跡】本居宣長旧宅

◆〈松阪〉の場所の力

本居宣長は伊勢国松阪の人である。宣長と、その活動の舞台となった松阪の歴史の魅力を一言で言うと、「とても大きい」だ。空間的にもまた精神的な意味でも、宣長が、また松阪の人が持つ世界は大きい。

たとえば宣長だが、宇宙に浮かぶ地球を想像し、万国図を見ながら米の稔る日本を考える。今なら何の不思議もないが、時代は一八世紀。地が球であるなどという考えがまだ共有されていない時期にである。

松阪は、戦国時代の武将・蒲生氏郷が開いた新しい町だが、その歴史の最初には、安南貿易で名を馳せた角屋七郎兵衛がいて、今も湊町の名前が残る。三井財閥の祖三井高利は本町の人。「現金掛け値無し」など斬新な商いの仕方や経営システムを構築した。

射和（いざわ）の大淀三千風（おおよどみちかぜ）はご存じか。蝦夷にこそ渡れなかったが全国を旅して、観光資源を発掘し紹介した人だ。三景など景勝地はもちろん、ミイラを見たり、立山ではブロッケン現象を観察、長崎で南蛮茶を飲む。南蛮茶、つまりコーヒーを飲んだ記録に残る最初の人だという。全国を回る三千風の武器は、俳諧と商人のネットワークであった。こんな先達がいたからこそ、隣国伊賀の松尾芭蕉は「奥の細道」の旅を成就できたのだろう。

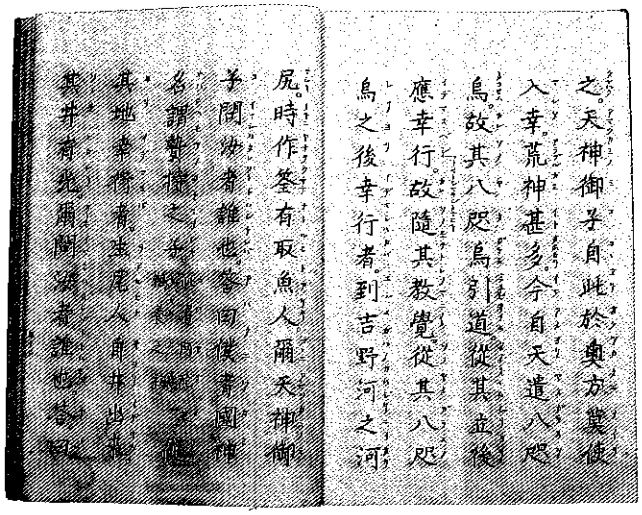
豪商小津清左衛門家の地下には万両箱が埋設され、分家の小津久足は曲亭馬琴のパトロンとなり、文庫にはご禁制のキリシタン版が秘蔵されていた。幕末の松浦武四郎も全国を旅し蝦夷を探索した。まだまだいる。伊勢の田舎町と侮るなかれ。スケールの大きさは群を抜く。〈松阪〉の場所の力である。藩主は遠い地にいて、旦那は松阪。経済は豊かで。参宮街道、和歌山街道の分岐点という要衝で、諸国への便りよし。

◆歴史の旅人　宣長

本居宣長（一七三〇～一八〇一）もまた旅人である。古典の世界に分け入り、日本人の心の原型



【国重要文化財】本居宣長六十一歳自画自賛像（部分）



【国重要文化財】古事記伝

を求めて旅を続けた。

宣長、本業は町医者である。仕事の傍ら『古事記』や『源氏物語』を研究し、賀茂真淵から継承した「国学」を大成したことは有名だが、もう一つの大きな仕事がある。それは七二年の生涯をきちんと記録したことだ。日記や系図、自画像、遺言書、またノートや書き入れがいっぱいある蔵書、『古事記伝』等著作の稿本、医療記録や家計簿のたぐいまで残していて、暮らしぶりから知的生活まで何でもわかるような錯覚にとらわれる。

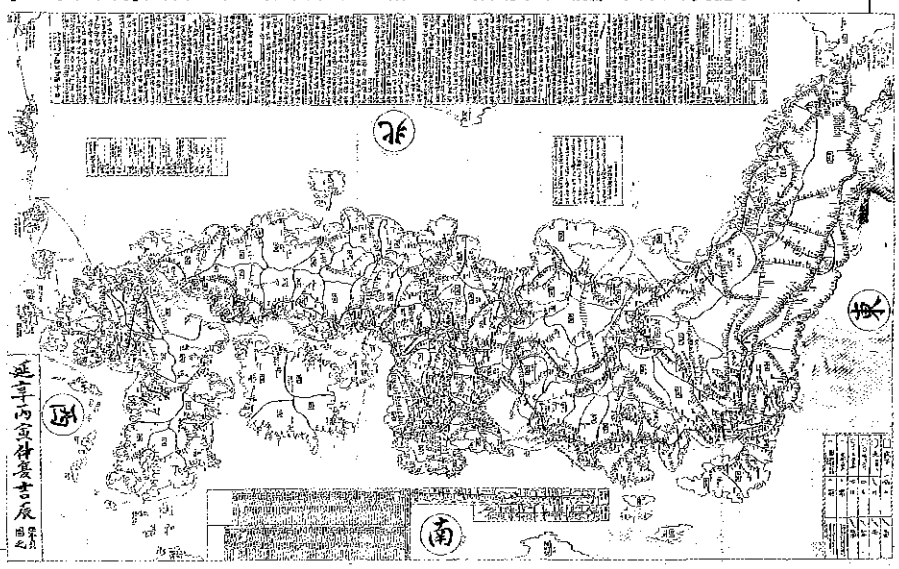
それらの資料が散逸することなく全部残っている。本居宣長記念館の収蔵品は、関連資料を含めると総点数一万六〇〇〇、内一九四九点が国重要文化財である。展示室には、文机や思索の疲れをいやした鈴、「古事記伝」の版木、薬箱。また『古事記伝』、『うひ山ぶみ』、『玉勝間』など自筆稿本が並ぶ。展示は季節で変わる。宣長理解を深めてもらうために、氏郷の茶杓や安南水指、三千風像、街道資料など収蔵庫にどっさりある松阪資料も選んで展示している。

宣長ってどういう人ですかと聞かれると、私は、「学問をする器械のような方だ」と答える。頭の中に古典や歴史の巨大なデータベースがある。いったん机に向かったら一切の感情の揺れがなくなるのだろう、その文字は美しい。美しさは学問の信頼度の高さを示している。こんな丁寧な字を書くのだから、きっと誤りなどあるはずがない、と思ってしまう。本当に美しい。毎日眺めてはため息をつく。

ところで旅には地図が必要だ。時空を超えるときには年表や系図も欠かせない。

宣長は地図と系図が大好きで、古典の世界をさまよっても、また現実空間を旅しても自分の

【国重要文化財】大日本天下四海画図（宣長17歳のときの作図。すでに視線は天下四海を捉えていた）





【国重要文化財】母勝書簡
（盃三杯以上は酒を飲むなと戒めた母の手紙と本居家の盃）

位置を見失うことはなかった。これは比喩ではない。記念館の展示室にはいつも何かしらの地図が展示されている。一七歳の時に描いた巨大な日本地図や架空の都市図とそこの住人の系図。出雲国風土記地図、地球一覧図。和歌浦に遊んだときの地図や御前講釈の際の殿様との位置図、泊まった旅館の間取り図などなど。展示はごく一部。主要なものは当館図録『本居宣長の不思議』をご覧あれ。

◆宣長を体で感じる

記念館は国史跡松坂城跡の中にある。一九〇九年、本居宣長旧宅（国特別史跡）を魚町から城跡に移築し公開、一九七〇年に本居宣長記念館が開館した。運営は公益財団法人鈴屋遺跡保存会。少し離れて旧宅跡や山室山奥墓（おくつき）など史跡も残る。

というより、松阪の町そのものが宣長世界への入口と言った方がふさわしいか。宣長がこの町の欠点だと指摘したゆがんだ町筋もその名残を留め、寺院、神社、また町と町をつなぐ小路、背割り排水など、一八世紀の余蘊はかすかだが確実に残る。

心が澄み渡るような『古事記伝』の筆跡をご覧いただき、谷崎潤一郎の心を揺さぶった宣長旧宅の薄暗さの中に座すと、きっと宣長の言う、洗練された美意識〈もののあはれを知る心〉や、満開の山桜のような麗しい心〈大和心〉、そして志を立て未来を信じ学び続けることのすばらしさ〈物学びの力〉の一端に触れる思いがするだろう。

記念館を出て夕暮れの町を歩く時、宣長の気配を感じることがあるかもしれない。

来年は、『古事記』成立一三〇〇年。その次の年は伊勢の遷宮。一一〇〇年の歳月を越えて『古事記』に「日本人の心」を発見した本居宣長と神の鎮まる伊勢の地に遊び、日本や日本人についてより深く理解し、またそのすばらしさを〈再発見〉していただきたい。

公益財団法人鈴屋遺蹟保存会 本居宣長記念館

●所在地：三重県松阪市殿町1536-7
Tel：0598-21-0312
●開館時間：午前9時～午後4時30分
●休館日：月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始、GW期間中は無休。
●入館料：大人400円　大学生300円
小学4年生～高校生200円
●アクセス：近鉄、JR松阪駅から市内散策しながら徒歩20分
●ホームページ：http://www.norinagakinenkan.com/

